工事の現場より

工事現場の臨春閣から特別出張！

企画展特別 ver.

vol.4 第二屋・第三屋

第二屋　立涌文様欄間障子

タテの波をよーく見ると、真っ直ぐに通った木目が見えるはず。この立涌文様は木を曲げて作った物ではなく、切り出して作った物なのです。木は生物材料なので、時間の経過や温湿度の変化でどうしても歪んだりねじれたりしてしまうことがあります。切り出した木がこんなに形が整っていて、うまく収まっている、とても素晴らしい技能です。

第二屋　黒漆螺鈿楼閣人物図扉

絵柄はすべて貝の内側の真珠層の部分を切り出して黒漆の地に貼り付けてさらに線刻を施した「螺鈿」により作り出されています。二枚は絵柄は似通っていますが意匠は異なっており、一枚は中国清朝時代の物、もう一枚は明朝時代の物とされています。（人物の顔の描き方などに注目！）

また地袋とのサイズもあっていません。おそらく舶来の何らかの調度品の一部であったものを地袋扉に仕立て直したものと推定され、設置された時期は詳細までは不明です。原三溪は臨春閣を「豊臣秀吉が建てた聚楽第の遺構」と考えており、この螺鈿の扉を秀吉が朱印船貿易によって入手したものと考えていたのかもしれません。

第二屋　花鳥人物図彫扉

この彫刻扉は第二屋の池に面した廊下、繋の間との境の場所にかつて設けられていました。扉が重く建物に負担がかかり、また日光・風雨にさらされやすい場所に螺鈿や漆塗りといった繊細な細工物を置くのは不適切であることから、建物から取り外し安定した環境の三溪記念館の収蔵庫に収めています。

建物内に扉が据え付けられた様子
（戦後修理後の写真：奈良文化財研究所所有）

第二屋　住之江の間・天袋戸／第三屋　天楽の間・地袋戸

床の間の脇棚は、下の方にある戸棚を「地袋」、上の方にある戸を「天袋」と称します。第二屋住之江の間の床の間は地袋戸（上記）は特徴的なため特別な名称がありますが、その他の戸には特に名称はありません。

とはいえ、数寄屋建築としての見どころ箇所の一つです。注目は上張りに用いられた繊細な模様の織り込まれた織物、色味も華やかです。また引手金物は二重の花びらを持つ瀟洒な菊が象られており、第三屋の天楽の間・地袋戸のものは、葉も意匠化されています。

金物細工は建築の見どころの一つですが、特に数寄屋造では遊び心・デザインの妙などがそういった箇所で際立つため、数寄屋建築見学の初心者が楽しむのにはお勧めの箇所です。

「花鳥人物彫扉」という名称※だけど、鳥、、、いないよね？
もし鳥が見つかったら教えてね！

※『三溪園所蔵品図録』（三溪園編・発行／平成17年）記載の作品名

＊「人物花木彫扉」という作品名で展示したこともあります。